

女性学/ジェンダー研究博士論文データベースをつくる

内藤 和美

1 はじめに

女性学とジェンダー研究は、セクシュアリティ研究、クィア研究、ゲイ/レズビアン研究等とともに、相互に関連し合う性に関する諸学問の中でとくに性別に関心を払い、性別について公正な社会の形成をめざす点で共通している。女性学は、不可視であった女性の経験の可視化と女性の当事者性に基づく理論化を、ジェンダー研究は、男女の二分割と分割間の権力関係を再生産する社会的文化的機序の解明を通じてそれをめざす（内藤 2012）。日本では女性学は 1970 年代後半から、ジェンダー研究は 1980 年代後半から研究活動が始まった。

2010 年に活動を始めた「女性学/ジェンダー研究博士論文研究会」は、活動の過程で、当初予定していなかった国内の大学で博士学位を授与された女性学/ジェンダー研究（以下、WS/GS）の実質をもつ論文のデータベース「WS/GS 博士論文データベース」を作成することとなった。本稿では、「WS/GS 博士論文データベース」作成の経緯、意義および今後の課題について述べてい。

2 女性学 / ジェンダー研究博士論文データベース作成の経緯

1970年代後半に、学問としての取組みが始まり、学会・研究会が発足した日本の女性学は、2007年～2009年ころ30年の節目を迎え、学会・研究会の「30周年」を画すさまざまなシンポジウム、プロジェクト、出版、学協会誌の特集等が行われた。できごとや活動や数字や課題が跡付けられ、記述され、課題や展望が議論された。それらに関わり、接する中で筆者は、日本の女性学とそこから展開したジェンダー研究の30年を真に振り返るには、もう一步踏み込まねばと感じてきた。「もう一步踏み込む」とは、30年間に形成された学問としてのアイデンティティを明らかにすることである。それには、蓄積されたWS/GSの知とその生産過程（課題認識、目的、概念・理論、分析枠組、方法）に踏み込んだ整理分析が不可欠である。図書、学術論文等として発表された多数の成果に対してどのような整理分析を得るかを考え、博士論文に注目することを思い至った。博士論文は、審査と学位授与によって研究の独創性と知見の新規性が認められており、WS/GSの知の生産過程と生産物に着目する一手段となると考えたからである。

2010年4～5月、WS/GSの実質をもつ博士論文の収集・読み込み・整理分析作業を共にする仲間を求めて周囲に呼びかけ、応答してくれた杉田雅子（群馬パース大学教授）、高橋由紀（国立女性教育会館客員研究員）、富永貴公（東海大学他非常勤講師）、西山千恵子（青山学院大学他非常勤講師）とともに「女性学 / ジェンダー研究博士論文研究会」として活動を開始した。

収集を始めたが、現在日本には「女性学」「ジェンダー学」という分野の学位を授与する大学はなく、学位分野によって自動的にWS/GSの博士論文を集めることはできないことは明らかである。そこで、WS/GSの実質をもつとみなす博士論文を独自に定義することとした。次いで、該当する論文をできる限り網羅的に把握する方法や収集方法を検討し、試行錯誤を経て、把握・収集の手順を決定した。それに基づき、把握した博士論文のリストや入手した論文を読み込み、記録するための様式を作成した。入手した論文を分

担して読み込み、様式に記録し、メンバーで共有・討論するという作業を重ねるなか、2010年秋、該当論文の網羅的把握について相談したジェンダー関連情報の専門家である青木玲子（国立女性教育会館客員研究員）さんより、博士論文リストをデータベース化するよう助言を受けた。データベース作成の意義、着手可否を研究会で協議した結果、次に記す3つの意義を確認し、博士論文の読み込み・整理分析を通じたWS/GSの学問的アイデンティティの解明という研究会の活動に加えて、WS/GS博士論文データベースの作成に取り組むこととした。

博士論文データベースの作成に着手するか否かを判断するにあたり、研究会内でもっとも懸念したことは、博士論文データベースは大学その他の機関、学協会等の組織的活動の一環として作成・運営されてこそ公共物として広く利用されるのではないか、インフォーマルな研究グループで十分活用されるデータベース運営ができるのか、という点であった。国立女性教育会館情報課をはじめWS/GSに係る情報専門家に助言を仰ぎ、データベースの活用度は、作成者/管理運営者が誰であるかより、どのように他ウェブサイトと関連づけるか（ハイパーリンク）による、ということが納得でき、作成を決めた。

2011年夏までに研究会でデータベースのあり方を固め、以降は筆者が単独でデータベースの運営・管理にあたってきた。研究会発足当初念頭になかったデータベース作成に活動を広げることを主導したのは筆者である。他メンバーのエネルギーは研究会の本来活動に傾注してもらい、拡大部分の負担は筆者が負うべきと考えた。

3 WS/GS 博士論文データベース作成の意義

WS/GS博士論文研究会としてデータベースを作成することには3つの意義があると考えられる。

WS/GS 博士論文データベースができること自体の意義

第 1 の意義は、WS/GS 博士論文データベースができること自体の意義である。国立国会図書館・国立情報学研究所「博士論文書誌データベース」には、1984 年以降に国内の大学で博士学位を授与されたすべての博士論文の書誌情報が収録されている。名古屋大学大学院国際開発研究科「学位論文を探すサイト」の「日本で受理された学位論文を探す」には、このほか「学位論文のタイトル・要旨・全文等を公開しているサイト」(博士論文)大学別 100、学会・分野別 3、「学位論文を販売しているサイト」大学別 2、会社 2 計 107 サイトが網羅されている。しかし、WS/GS の博士論文のみを登録したものはない。WS/GS に特化した博士論文データベースができることで、WS/GS の研究者・大学院生が、まとまった研究情報を入手しやすくなる。また、新たな集積のしくみを 1 つ加えることで、研究間の相互作用、学問としての歴史的記録や検証の促進に貢献し得るだろう。

そもそも、日本の WS/GS は、学問領域として独立や大学の学部・学科等の設置よりむしろ、あらゆる学問に課題認識を持ち込むかたちで発展してきた。大学院では、2013 年 4 月現在、2 研究科に、WS/GS を専門とする前期(修士) 2 課程、後期(博士) 1 課程が開設されている⁽¹⁾。学士課程には、WS/GS を専門とする学部・学科はない。そのかわり、1 大学に主専攻(教養学部 gender and sexuality studies 主専攻)⁽²⁾、9 大学に 10 コースの副専攻⁽³⁾が開設されている。副専攻とは、各自が主に専攻する分野のほかに、第 2 の専攻とし学習できる科目のまとまりを言う。たとえば「文学部教育学科心理学主専攻、ジェンダー副専攻」というように。

こうした発展経緯は、日本の WS/GS の知とその生産過程に固有の強み・可能性をもたらしてきた面があるに違いない。しかし一方、とくに、大学に学部・学科をもたない学問であることは、体系的な知の形成・集積と担い手の育成に関しては、不利な面があると言わざるを得ない。大学に、WS/GS の知の創出を目的とする部門と WS/GS の教育研究を主な職務として勤める教員がわずかしかなかく、上記 gender and sexuality studies 主専攻を唯一の例

外として大学でこれらを専門に学ぶ学生がいないということだからである⁽⁴⁾。

WS/GS の博士論文データベースの作成は、こうして知を集積して活用する体制に他学問に比べて弱い面のある WS/GS の、知の集積・活用のしくみを1つ増やすことにならないだろうか。

研究者がデータベースを作成・運営する意義

2つめは、情報専門職・情報技術者ではなく、研究者がデータベースを作成・運営する意義である。現在日本には「女性学」「ジェンダー学」という分野の学位を授与する大学院はなく、学位分野によって自動的に WS/GS の博士論文を集めることはできない。集約・網羅のためには、内容に踏み込む付加的作業や採否の判断が必要になる。これは研究者の活動に属する。データベースの構築・稼働後、登録内容の整理分析、利用の状況や課題の検証、学術的価値を高めるための検討等もなされ得る。

公刊形、リポジトリの情報を収録している意義

3つめに、データベースの収録内容の特徴である。前述のように、WS/GS 博士論文データベースは WS/GS の実質をもつ博士論文をできる限り網羅的に把握し、収集入手し、内容を検討する活動から生まれた。博士論文自体は作成数も所蔵場所も極めて限られており、閲覧も入手もしがたい。一方、論文が図書として出版されていたり、論文の一部が学術雑誌に掲載されていれば、それらは入手しやすい。そのため、収集入手のために、当初から国立国会図書館・国立情報学研究所「博士論文書誌データベース」にすでに登録されている書誌情報だけでなく、当該論文を所蔵する「機関リポジトリ」と公刊の有無を調べ、ある場合にはその内容を記録した。データベース化した場合、これらの情報は利用者を本文・要旨・出版された図書・学術雑誌掲載論文等に直接つなぐものとなる。

4 データベースの構築

構築期間

データベースの構築期間は 2010 年 9 月～2012 年 7 月である。

登録対象 WS/GS の内容をもつ博士論文の網羅的把握

- ①把握対象 研究会での議論を経て、WS/GS の論文であることを「女性の当事者性からの理論化（その展開としての男性学を含む）、ジェンダーバイアスの解明・解消につながる課題認識を含むこと」と捉えることとした。また博士論文は、国内の大学で学位授与された論文および海外の大学で学位を授与され、国内で出版された論文を把握対象とすることとした。

②把握方法

a 検索語による学術データベースの検索

検索には、国立国会図書館・国立情報学研究所「博士論文書誌データベース」を使用した。検索語は、国立女性教育会館「女性情報シソーラス」（2002）に収録されている用語の中から、試行錯誤を経て、敏感度と特異度が共に高いと判断された表 1 の 15 語を用いることとした。検索により、標題にこれら語を含む博士論文が把握される（表 1）。

表 1 使用した検索語

ジェンダー	フェミニズム	男女平等	男女共同参画	女性学
男性学	性別分業	性別役割分業	家父長制	女子教育
婦人教育	女子労働	女性労働	婦人参政権	女性の権利

b 学術データベースの検索によって把握されない該当論文の追加

選定した 15 の検索語によるデータベースの検索によって把握されていない該当論文を補うため、「標題に 15 検索語を含まない WS/GS の博士論文」および「海外の大学で学位を授与され、国内で単行本として出版

された論文」を収集追加する作業を行った。収集は、主に、国立国会図書館・国立情報学研究所「博士論文書誌データベース」に、当初は博士後期課程と WS/GS の研究所⁽⁵⁾をともにもつ 17 大学、2012 年からはこれに、該当論文の多い 7 大学（大阪大学、慶應義塾大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、広島大学、九州大学）を加えた計 24 大学の名称を入れることによって当該大学で授与された博士論文を一覧し、その中から、WS/GS の論文に当たると考えられるものを抽出することとした。

抽出された論文は、論文そのもの、または公刊物にあたるか、目次・概要紹介の確認等それに準じる作業によって採否判断を行った（2011 年度は、研究会メンバーの分担による確認作業と協議を通じた採否の決定、2012 年以降は、確認、前年の採否基準を踏襲した採否の判断とも筆者の作業による）。

2012 年 8 月 1 日のデータベース公開時までには、検索語により 241、大学名を手がかりにした収集・検討により 101、他 1 計 343 論文が把握された。

データベース登録項目の設定

国立国会図書館・国立情報学研究所「博士論文書誌データベース」の項目を基に、どのような項目があれば多様な利用ニーズに応えられるかを検討し、表 2 の 14 項目を登録項目とした（表 2）。

WS/GS 博士論文研究会として取組んだここまでの作業で WS/GS 博士論文データベースの大枠を構築することができた。これ以降は、筆者がデータベース関係業務に従事することとした。前述同様、負担は研究会の発足とデータベース作成着手を主導した筆者が負うべきだからである。

表2 WS/GS 博士論文データベースの登録項目

書誌 ID	学位所得者 / よみ (カナ) / よみ (英字)
性別	所属 (登録時)
タイトル / よみ (カナ)	言語
学位取得大学名 / 機関コード	取得学位分野 / コード
報告番号 / コード	学位授与年
検索語・把握方法	科学研究費補助金分野細目番号
機関リポジトリ / URL	
公刊形 / タイトル / 出版社 / 出版年 / 雑誌名 / 巻号・頁	

把握・収集された論文のデータベース登録内容一覧表の作成

WS/GS 博士論文研究会として作成してきた WS/GS 博士論文の一覧に、前項登録項目のうち情報未収集であった事項を追加する作業を経て、データベースへの初期登録内容を整えた。

WS/GS 博士論文データベースの完成

WS/GS 博士論文データベース WS/GS 博士論文研究会として構築専用ウェブサイトを開設し、データベース管理システムを構築した（委託先事業者は朝日印刷工業（株）デジタルメディア開発部）。

併せて、WS/GS 博士論文データベースのウェブサイトのホームページに掲載する、データベースと利用方法の説明を作成した。試行を経て、これらを確定し、前述 343 論文を登録、2012 年 8 月 1 日に「女性学 / ジェンダー学博士論文データベース」として公開した。

5 データベースの周知と利用促進

大学付属 WS/GS 研究所と WS/GS 関係学協会およびジェンダー研究メーリングリストを通じて、WS/GS 博士論文データベースの公開と特徴等を知らせ、利用を呼びかけた。

また、当時、国立女性教育会館情報課長の市村櫻子さん（現東京大学附属図書館柏地区図書課長）より、国立女性教育会館「女性情報ポータル Winet」

III NWEC 実践報告

からも、WS/GS 博士論文データベースにアクセスできるよう支援・協力をいただいた。同じく、認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 「女性と女性の活動をつなぐ総合サイト」「女性学研究室 博士論文」の渋谷典子副理事長、牟田和恵副理事長、荒木菜穂サイトディレクションチームメンバーからも、WS/GS 博士論文データベースにアクセスできるよう支援・協力をいただいた。

6 データベースの管理運営と現時点登録済論文の内訳

公開から 1 年余、筆者がデータベースを維持管理しつつ、この間に新たに公表された検索語による 13 論文、調査によって把握された 40 論文を追加し、2013 年 6 月に登録情報を更新した。登録論文は 396 となった。

現登録 396 論文の内訳は表 3 の通りである。表に見られるように、検索語は「ジェンダー」が、学位授与大学は「お茶の水女子大学」が抜きん出て多い。学位分野は「学術」が最も多く、論文種別は課程博士が 7 割余りを占めている (表 3)。

7 今後の課題

WS/GS 博士論文データベースの今後の管理運営、活用には、次のような課題があると考ええる。

WS/GS 博士論文としての採用基準の運用

WS/GS 博士論文データベースへの登録基準は、「女性の当事者性からの理論化 (その展開としての男性学を含む)、ジェンダーバイアスの解明・解消につながる課題認識を含むこと」としているが、家族やセクシュアリティを主題とする論文をはじめ、基準の運用は実際にはかなり悩ましい。意見・批判を受けつつより妥当な採用基準とその運用を検討し続けていきたい。

表3 登録済論文の内訳

事項	内 訳 (件数)
検索語	ジェンダー (187), フェミニズム (22), 女性労働 (21), 女子教育 / 婦人教育 (14), 男女平等 (6), 性別分業 (4), 男女共同参画 (3), 女性の権利 (2), 家父長制 (1), 女性学 (1), 婦人参政権 (1)
検索の手掛りにした大学名	お茶の水女子大学 (79), 城西国際大学 (8), 日本女子大学 (7), 立教大学 (5), 九州大学 (4), 奈良女子大学 (4), 大阪大学 (3), 昭和女子大学 (3), 東京大学 (3), 名古屋大学 (3), 早稲田大学 (3), ICU(2), 大阪府立大学 (2), 慶応義塾大学 (2), 東京女子大学 (2), 東北大学 (2), 一橋大学 (2), 愛知淑徳大学 (1), 京都大学 (1), 京都橘大学 (1), 神戸大学 (1), 筑波大学 (1), 津田塾大学 (1)
他	本人からの申告 (1), PhD(2)
学位分野	学術 (82), 文学 (58), 社会科学 (52), 社会学 (41), 人文科学 (27), 教育学 (22), 法学 (18), 経済学 (14), 比較文化 (11), 人間科学 (9), 心理学 (6), 政治学 (3), 経営学 (3), 農学 (3), 人間・環境学 (3), 国際文化 (3), 国際関係学 (2), 地域研究 (2), 医学 (2), 言語文化学 (2), 社会人類学 (2), 社会福祉学 (2), 人間文化科学 (2), 総合政策 (2), 比較文明学 (2), 比較社会文化 (2), 神学 (1), 商学 (1), 保健学 (1), 工学 (1), 栄養学 (1), 言語学 (1), 水産学 (1), 学校教育学 (1), 英語英文学 (1), 地理学 (1), 国際開発学 (1), 生活環境学 (1), 文化政策学 (1), 地域政策学 (1), アメリカ研究 (1), 行動科学 (1), 総合社会文化 (1), アドミニストレーション (1), 国際公共政策 (1), 社会デザイン学 (1), PhD(2)
授与大学	お茶の水女子大学 (99), 大阪大学 (21), 東京大学 (19), 奈良女子大学 (15), 名古屋大学 (14), 京都大学 (13), 筑波大学 (12), 早稲田大学 (12), 慶応義塾大学 (11), 城西国際大学 (11), 東北大学 (10), 広島大学 (10), 一橋大学 (8), 昭和女子大学 (8), 立教大学 (8), 神戸大学 (7), 九州大学 (7), 日本女子大学 (7), 北海道大学 (6), 東京都立大学 (5), 関西学院大学 (5), 法政大学 (4), 立命館大学 (4), 新潟大学 (3), 大阪市立大学 (3), 大阪府立大学 (3), 国際基督教大学 (3), 上智大学 (3), 東洋大学 (3), 日本大学 (3), 千葉大学 (2), 中央大学 (2), 東京外国語大学 (2), 東京学芸大学 (2), 横浜国立大学 (2), 女子栄養大学 (2), 東京女子大学 (2), 愛知淑徳大学 (2), 武蔵大学 (2), 金城学院大学 (2), 京都橘大学 (2), 関西大学 (2), 同志社大学 (2), 甲南大学 (2), 弘前大学 (1), 吉備国際大学 (2), 岩手大学 (1), 東京工業大学 (1), 総合研究大学院大学 (1), 兵庫教育大学 (1), 山口大学 (1), 高崎経済大学 (1), 熊本県立大学 (1), 東京国際大学 (1), 川村学園女子大学 (1), 青山学院大学 (1), 専修大学 (1), 白百合女子大学 (1), 明治大学 (1), フェリス女学院大学 (1), 京都産業大学 (1), 龍谷大学 (1), 甲南女子大学 (1), 久留米大学 (1), 長崎純心大学 (1)
授与年	1985年 (1), 1990年 (1), 1993年 (5), 1994年 (2), 1995年 (6), 1996年 (4), 1997年 (6), 1998年 (8), 1999年 (8), 2000年 (19), 2001年 (24), 2002年 (22), 2003年 (22), 2004年 (28), 2005年 (38), 2006年 (41), 2007年 (24), 2008年 (32), 2009年 (29), 2010年 (40), 2011年 (22), 2012年 (16)
学位種別	課程 (281), 論文 (111), PhD(2), 不明 (2)

利用の拡大

より多くの人に利用していただけるよう、発信とハイパーリンク先の拡大をはかる必要がある。

管理運営体制の安定、組織化

WS/GS 博士論文データベースは、WS/GS 博士論文研究会で立ち上げ、その後、筆者が個人で管理運営にあたっている。公開して未だ2年に満たない今は、まず運営を安定軌道に乗せることが第一義であるが、公共利用に供し続けるのであれば、機を逸さず、組織機関への移管をはかる方がよい。

検索・更新作業の効率化

該当論文の検索・把握、追加登録・更新の現行方法は、相当程度手作業を含んでいる。ウェブ情報発信技術等の活用を通じて、可能な過程の効率化をはかりたい。

WS/GS 博士論文データベース登録情報を用いた学術研究

登録されている博士論文やその公刊物の被引用状況に着目すれば、WS/GS の研究間関係を明らかにできるかもしれない。あるいは、概念や分析枠組に着目すれば、日本の WS/GS の構造に迫れるかもしれない。WS/GS 博士論文データベースを広く公共利用に供しつつ、登録情報を用いた学術研究に取組みたいと考えている。

注

- (1)お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科同博士前期課程ジェンダー学際研究専攻、城西国際大学大学院人文科学研究科修士課程女性学専攻課程。
- (2)国際基督教大学教養学部 gender and sexuality studies 主専攻。

- (3)お茶の水女子大学全学部コア・クラスター ジェンダーコース、東京女子大学現代教養学部女性学・ジェンダー副専攻、日本女子大学人間社会学部キャリア女性学副専攻、日本女子大学人間社会学部以外の学部現代女性とキャリア連携副専攻、川村学園女子大学全学部女性学副専攻、城西国際大学国際人文学部女性学副専攻、聖心女子大学文学部ジェンダー学副専攻、同志社大学社会学部ジェンダー副専攻、和光大学全学部ジェンダー・スタディーズ・プログラム大学認定資格、神戸女学院大学全学部女性学インスティテュートインターディシプリナリー・プログラム（2009年10月独立行政法人国立女性教育会館情報課および林祐子さんへの照会によって作成した一覧に基づき作成）
- (4) 学部とその直上に置かれる大学院という形態はないが、WS/GS の知とその担い手の創出・集約拠点として、学部の直上に置かれるのでない横断・学際的大学院、以下に記す大学付属の女性学 / ジェンダー研究所、同じく学会研究会がある。そのほか、科学研究費補助金の申請カテゴリーとして「ジェンダー」細目ができたこともそうしたしぐみの1つと言える。
- (5)大学附属の女性学 / ジェンダー研究所には、現在以下の 20 機関がある。愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所、大阪府立大学女性学研究センター、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、共愛学園前橋国際大学地域共生研究センター、京都橘大学女性歴史文化研究所、神戸女学院大学女性学インスティテュート、国際基督教大学ジェンダー研究センター、城西国際大学ジェンダー・女性学研究所、昭和女子大学女性文化研究所、東京女子大学女性学研究所、東北大学ジェンダー平等と多文化共生センター、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター、日本女子大学総合研究所、一橋大学大学院社会学研究科ジェンダー社会科学研究センター、福岡女子大学女性生涯学習研究センター、明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター、名城大学ジェンダー研究所、立教大学ジェンダーフォーラム、和光大学ジェンダーフォーラム、早稲田大学ジェンダー研究所。学会・研究会としては、次のものがある。クィア学会、国際ジェンダー学会、ジェンダー法学会、「女性・人権・戦争」学会、社会政策学会、女性労働問題研究会（SSWW）、日仏女性資料センター、日本

III NWEC 実践報告

語ジェンダー学会、日本ジェンダー学会、日本女性学会、日本女性学研究会、日本フェミニスト経済学会、公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム、女性ライフサイクル研究所、公益財団法人東海ジェンダー研究所（独立行政法人国立女性教育会館「女性情報ポータル Winet」）。

また、日本学術会議には、「科学者委員会」のもとに「男女共同参画分科会」が設置されている。

引用文献・資料

国立国会図書館・国立情報学研究所 博士論文書誌データベース

http://dbr.nii.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000016GAKUI1

独立行政法人国立女性教育会館 女性情報ポータル Winet

<http://winet.nwec.jp/>

女性情報ナビゲーションー女性情報シソーラス

<http://winet.nwec.jp/navi/modules/weblinks/singlelink.php?lid=9>

女性情報ナビゲーションー教育研究ー学術研究ー大学附属研究所

<http://winet.nwec.jp/navi/modules/weblinks/viewcat.php?cid=198>

女性情報ナビゲーションー教育研究ー学術研究ー学会 / 研究会

<http://winet.nwec.jp/navi/modules/weblinks/viewcat.php?cid=199>

女性情報ナビゲーションー思想・理論・運動ー女性学

<http://winet.nwec.jp/navi/modules/weblinks/viewcat.php?cid=44>

女性学 / ジェンダー学博士論文研究会 女性学 / ジェンダー学博士論文データベース <http://wsgs-db.jp/search/>

認定 NPO 法人ウィメンズ アクション ネットワーク (WAN) 女性と女性の活動をつなぐ総合サイト

女性学研究室 - 博士論文

<http://net.wan.or.jp/hakuron/>

内藤和美 2012 「女性学」『社会教育・生涯学習辞典』（社会教育・生涯学習辞典編集委員会編）・朝倉書店 306-307

名古屋大学大学院国際開発研究科 学位論文を探すサイト

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/service/library/guide/dis.html>

日本学術会議科学者委員会男女共同参画分科会

<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/danjyo/index.html>

(ないとう・かずみ 芝浦工業大学特任教授)